

---

# 極彩タップス

夜助

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

極彩タップス

### 【Nコード】

N5201C

### 【作者名】

夜助

### 【あらすじ】

この物語は、親の借金を背負ってしまった少年、福梨有希が、いろんな人々から、いろんな苦難を受ける、いろんな形の受難劇である。なお、本作のサブタイトルの意味は、意味なんてない。

返済その1「惚れた女は、皆、すでに彼氏持ち。イエイ！」

「借りた物は返す…。なんで、最近これ出来る人、少ないかなー。  
なあ、福梨有希君？」

と、筋肉質の巨漢は言う。

巨漢は、鮮やかな色彩のアロハシャツと、白のズボンが似合っている。そして、強面。

僕、福梨有希は、そんな巨漢に睨まれ、売り飛ばされた高級マンションのドアの前で正座をしている。いや、させられている。

なぜ、僕は冒頭から、こんな目に合っているのか…。

アロハの似合う巨漢、名前は、確か、赤井秀人あかい ひでひとと言った。その赤井さんが、僕の親がした借金の数メートルはある借用書を、僕の目の前に差し出す。そう、彼は借金取りだ…。

「いやー、君も不幸だねー。数年前から、事業に失敗した、君の両親が、うちの金融会社から莫大な借金を繰り返し、そして、あまりにも膨れ上がり返せなくなった借金を、一人息子である君に渡す形で、トンずら…」

赤井さんが、ベラベラと僕の事情を話してくれた。

そう、まさに、その通りなのだ。

親が借金していたのは、知っていたさ。学費すら払えなくなって、僕は高校を中退。そして、アルバイトをして、親の借金の返済に努めていた。

なのに、今日日本の朝、目を覚ましたら、僕の両親は失踪していた…。しかも、部屋にあった家具などは、すべて金融会社の方々に持っていかれ…。気付いたら、その金融会社の鬼の取り立て人、赤井さんに残りの借金の返済を迫られている。

まとめると、僕は、選択する余地なくして、両親の負の遺産を受け取り、こんな化け物みたいな男に、残りの借金について、責められている。なんて、ひどい親だ…。

「すみませんが…、こうして、家から出され、今後、どうして生きていけばいいか解らない僕に、そんな多額の借金は返せません…。だからと言って、カ ジヤ、ラ アー ームみたいに、変なギャンブルさせないで下さい…」  
と、怖いが勇気を出して、本音を言ってみた。  
すると…。

「なんで、『はい！返します！』の一言が言えないんだ？てめえ？」

赤井さんの語調が変わった。僕は、さっきトイレに行かなかったら、間違はなく漏らしていただろう。

「とりあえず、返済を一カ月延ばしてやるから、少しでも、返済するよう努力すんだな…」

そう言っつて、赤井さんは話を切り始めた。

「あと、金返せないからって、死んだりするような真似すんなよ…。いいな…」

と言いつつ、彼は立ち去る。なんて、でかくて怖い背中だ…。アロハの赤が、血に見えてきた…。

ていうか、僕は、あなたが死ぬほど怖いんですけど…。

ああ！！とりあえず、家はないし、どこで暮らして、なにを食べればいいんだよ！！！！

返済その2「立ち読みで、週刊誌の袋とじを無理して見るのは、やめなさい」

福梨有希は、若くして、借金まみれ。もう17歳にして、人生に絶望していた。

しかし、世の中、捨てる神あれば拾う神あり。彼に、拾う神が出現したのだ。

ガタン、ゴトン…。

有希は着替えなどを積めたカバン片手に、電車の席に座りながら、揺られていた。平日の昼間の電車内は、人気なく静かだ。

はぁ…と、有希はため息を吐く。

「なんで、僕が電車に乗っているのかと言つと、借金で家から出され、手当たり次第に、居候させてくれないかと、親戚たちに電話したら、一件だけ、居候させてくれるトコがあつて、今から、そこに向かっているんだ」

と、有希は話相手がいないのに、一人で、まるで解説のような独り言を喋っていた。

居候させてくれるのは、有希の従姉の女性。もう十年以上は会つたことのない、顔をすら覚えていない人だ。家出したらしく、親戚の集まりなどに顔を出さないため、ほぼ忘れられた存在で、皆から敬遠されていた。

しかも、聞いた噂じゃ、かなり名を轟かせているレディースの暴走族をやっている、かなりメチャクチャな生活を送っている人らしい…。

そんな従姉に、頼ってしまうほど、有希の状況と精神はクライマックスだった。

「はぁー」

有希は、不安と緊張で倒れそうだった。

そして、電車は目的地に止まり、有希は改札を通過して、駅前に出た。今まで、高級マンション街に住んでいた彼には、この駅前の建物や施設に物足りなさを感じていた。

そんなことより、問題は例の親戚であった。

(グレて、レディースやつてるらしいからな…。変な車、バイクで来たりして…。ていうか、それ以前に、変なクスリしてたり…。あつ、いや、それどころか、人を…)と、有希の頭に嫌な想像が広がっていると…。

「あのおう？もしかして、福梨君？」

可愛らしい声が、有希の名を呼んだ。

「へっ？」

有希は呼ばれた方に、首を向けた。

すると、そこには、今まで、有希が見たことのないくらいの眩しい輝きを放つ、おしとやかな美人の女性が。

「誰だ？と思い、有希は聞いてみた。

「えっ、あなたは？」

「従姉の京山紅美」

彼女が、例の従姉だった。

「なっ!？」

と思わず、有希は鼻水を飛ばして驚いた。その鼻水は汚かった。

彼女が乗ってきた軽のワゴンRの助手席に、有希は鼻水を吹いてから、荷物を後部座席に置いてから乗った。どう見ても、ヤンキーのシャコタン仕様の車ではなく、普通の車だ。

彼女は、ハンドルを握り、車を発進させた。

「親の借金背負っちゃって、大変ね」

と、紅美は有希に話し掛けた。喋り方からして、クスリはやってなさそうだ。

「ええ…」

「私も、借金してて返済してる身だけど、困ったことがあったら頼ってね」

そう優しく彼女が言う。有希は、そう言われて、彼女がヤンキーなのかが、どうでも良くなった。むしろ、そんな優しい言葉を掛けられて泣いた。

「あつ、ありがとうございます…」

「どつ、どしたの？」

有希が、いきなり泣き出したので、紅美はビックリした。

(にしても、従姉とはいえ、こんな美人さんの家に暮らすことになるとは…)

と、有希は世の中、悪いことだらけではないと、鼻で笑い始めた。

「あの、住まいは、アパートですか？」

と、有希は聞いた。

「ううん。私も、実は居候してる身で、住み込みで定食屋で働かせてもらってるの。その定食屋さんが、借金しちゃってさ…」

紅美は苦笑いで、そう話す。

「そりゃあ、大変ですね…」

どこも、大変なんだなーと有希は思った。

「あつ、着いたよ」

そう言って、彼女が車のブレーキを踏んだ。停車した先には、ちよっと古い建物の定食屋が。

荷物を車から降ろして、有希は紅美と一緒に、これから、居候させてくれる定食屋に入った。

(これから、ここで暮らすのか…)

有希は、借金を背負って絶望していたが、美人で優しい従姉の紅美と出会い、再び、心の中に希望を取り戻した。  
(なんとかして、親の借金を返してみせる!)  
と、希望を新たに、定食屋の戸を開けた。

「あっ！」  
「んっ？」

有希が戸を開け、真っ先に目に入ったもの…。それは、トンカツ定食を食べている鬼の借金取り、赤井秀人の姿だった。

『希望』の文字が、『絶望』に変わった瞬間を、有希は感じた。

### 返済その3「十円玉をタバスコで磨くと、ピッカピカ」

「えっと、今日から、ここで居候させてもらいます、福梨有希です…。迷惑掛けてしまうかもしれませんが、お店の手伝いもしますので、よろしくお願いします…」

有希は、これから、お世話になる定食屋『色彩園』のカウンターの前で、挨拶をした。居候させてもらう紅美の居候先の定食屋で、暮らしをさせてもらうのだから、きちつと自己紹介しなければならぬのが、筋であり、礼儀である。

彼の挨拶を、初老の店主の白井猛（しらい たけし）も、恐い顔をしているが、良い笑顔で…。

「おう、よろしくな」

と、不器用ながらも挨拶を返す。そんな男の優しさがにじみ出る彼の笑顔で、有希はホッとす。

「すみません、いきなり、居候させてもらって…」

有希は改めて、礼をする。

「いやいや、何度も礼などしないでいいぞ。最近の若者は礼儀が正しいな、ハハハ！」

と、店主は豪快に笑う。

（良かった…。いい人、そうだ…）

美人の従姉の紅美と、豪快で気持ちの良い店主。これから、楽しい生活が送れると思っていた…。  
が…。

「すみません…。ご飯おかわり」

アロハが似合う赤井秀人の声が、有希の新たに芽生えた希望を打ち壊していた。

（なんで、借金取りが、ここに居るんだよ…）

有希は、頭を抱えた。怖くて、赤井の存在を黙認しているが、無意識に汗を流していた。

「あつ、今、お持ちしますよ、赤井さん」

と、紅美が赤井の席から、茶わんを取った。すると、ダジャレではないが、赤井が名の通り、赤い顔になった。

「あつ、紅美さん。すつ、すみません。ハハハ…」

紳士的な喋り方をする赤井に、有希は…。

（なんか、キャラ違う！第1話と、同じ人？）  
と、思った。

「いえ、赤井さんには、毎日来てもらってて、しかも、借金の返済を延ばしてもらってますので、このぐらい」

と、紅美は笑顔で言いながら、受け取った茶わんを持って、台所へ向かって行く。

（毎日、来てんだ、この人…。そういえば、この定食屋は借金していると聞いた…。たぶん、ここも、僕の親と同じトコから、借金してて、しかも、同じ取り立て人かよ…）

有希は、状況を把握した。更に、紅美と話した時の赤井の様子から…。

（たぶん、紅美さんに気があるな…）  
と、感付いた。

「ありがとうございますー」

紅美の可愛らしい声を、背に受けて、赤井は隠しきれない笑顔をしながら、店を出た。

よほど、良い気分なのか、店を出た後、スキップしながら、タバコをポケットから出した。

「ふはは…、やはり、紅美さんは可愛いぜ…。ハハハ…」

と、タバコをくわえながら、赤井は笑っていた。そして、ふと後ろを向くと…。

「ぶっ！！」

赤井の後ろに、有希が居た。驚いて、赤井はタバコを吹き出した。有希は、見てはいけないものを見てしまった罪悪感に支配されていた。

「なんで、てめー、俺の後ろいんだよ！！ガキ！！」  
顔が赤くなつた赤井が、有希の服の襟首を掴んだ。

「あなたが、店にライター忘れてつたので渡しに……」

有希が、赤井が落としたライターを手に持ち、苦し紛れに言った。そのライターを、赤井は乱暴に取り、襟首を離した。

「このクソガキが！借金、さっさと返さんか！あと、てめー、なんで、紅美さんとここに居候すんだよ！！」

定食屋で耳に挟んだことを思い出した赤井が、有希に迫り寄つた。それに対し、有希は……。

「紅美さんとは、従姉なんですよ」と、言った。

「なんだとおおおおー！！！！！！！！！！」

赤井は、大きな叫びを上げて固まった。

この様子を見て、有希はこう思った。

(利用できるな……)

福梨有希は、鬼の借金取り、赤井秀人(27歳)の弱点を発見した。

返済その4「君は野球する方？それとも、される方？」

前回までの話。

改造人間、福梨有希は借金まみれである。そんな彼は、少しでも借金を返すために、今日も働きまくる。

果たして、彼は借金を返せるのか？そして、借金取りの赤井秀人の魔の手から、居候先の従姉のお姉さん、京山紅美を守ることが出来るのか？他人が、ビリーズ・ブート・キャンプをやるのは、勝手だが、長続きできるのだろうか！？ていうか、周りの話題に合わせるために、人はビリーをやるのだろうか！？

居候初日を、赤井が現れた以外は楽しく過ごせた有希は、本日から、定食屋『色彩園』の手伝いをする事になる。

開店してから、2時間経った昼の午後1時。有希は、店主から頼まれた食材の買い出しに、街に出た。

「へえ、なかなか、賑わってて綺麗な街並ー」と、多くの人が歩き、柔らかな日差しと建物が重なる街並を、有希は良い気分で、街を歩いていた。

が…。

「よう、福梨君！」

その声に、有希の体がビクッ！となった。

どこから現れたのか、礼の赤井秀人が有希の前に…。しかも、満面の笑顔で…。

「あつ、赤井さん…。こんばんわ…」

「今は、昼間だぜ。有希君」

有希はガチガチに固まりながら、挨拶した。赤井のアロハは、や

はり、血で染まっているように見える。

「これから、どこ行くんだい？ん？」

と、有希の肩に赤井は手を置く。この手で、何人の人の血を吸ったのだろうと、有希は思った。

「買い物に行つてたんですよ…。じゃあ、さいなら…」

有希は、赤井の手を振り払おうと歩き出すが、赤井の手が万力のように、肩に噛み付いているので、歩き出せなかった。

「ははは…、すごい握力ですね…」

「で、きみー。紅美さんが暮らしている定食屋に、昨日から、住み着いたんだらう？」

急に、赤井は話を変えた。たぶん、これが、本題だらう。

「はい…。一緒に、ご飯食べたりして、喋ってました…」

「へえ…。そうなの…。羨ましいねえ…」

顔が怖い、顔が怖い、顔が怖い！肩が痛い！と、有希は赤井の顔が変わって行くのを見た。そして、赤井に握られた肩の痛みが増していく…。

(人が、怒る瞬間を見てしまった…)

有希は、なんかのマンガの台詞を引用したような言葉を頭に浮かべた。

「君…、まさか、紅美さんに変なこと、してないよね…。あるいは、されてないよね…」

鬼のような形相の赤井が、有希を睨みながら聞いた。

「いやいや、するわけなかとですたい…。あたしゃ、チエリー・アノド・ヴァージンだきゃあ…。第一、部屋は別々ですにゃあ…」

恐怖のあまり、語尾がメチャクチャになりながらも、有希は拒否する。

「そこまで、聞いてはない…。でも、まさか、紅美さんの下着姿か、裸を見たりしてないよね…。あるいは、風呂とか、着替えを覗いてねえよなあ？」

「それも、ありません…」



極彩タップス

「青春だな……」  
そう赤井が、青く澄んだ空を見上げながら言った。

## 返済その5「空っぽの胃に、コーラはキツイ」

有希は、居候させてもらっている定食屋『色彩園』の手伝いをして  
いる。不器用だが、気の優しい店主と、美人で優しい従姉の紅美に  
囲まれ、ハッピーに毎日を過ごせると思ったが、借金取りの赤井秀  
人の存在で、過ごせそうにはなかった。

気付いたら、奴は、いつも店に居て、飯を食っているのだ。

「紅美さん、鯖のみそ煮で…」

と、赤井は、紅美の前では普段の狂暴さを抑え、紳士的に振る舞う。  
「はい、いつも、ありがとうございますー」

と、赤井の本性を知らない、というか、気付いてない紅美は笑顔で、  
彼に接する。

そんな二人の様子を、遠くの厨房から、有希と店主は見ている。  
店主も、奴の本性を知っている。だが、奴が怖いので、紅美に、奴  
が本性を言えないでいる。

「店主、なんで、あいつ毎日来てるんですか！？僕が、ここに来て  
からの四日間、毎日ですよ！」  
と、有希が店主に言う。

「奴には、借金してる身だ…。うかつに、下手なこと言えないし、  
なんだかんだで、結構ー、返済を延ばしてもらってるし…」

苦い顔で、店主は答える。

「大体、借金したのは何故です？失礼ですが、この店は繁盛してる  
方じゃ？」

有希は墮落した親のせいで、借金を背負ったが、店主には墮落し  
ている感じはない。なのに、何故、借金したかを聞いてみた。

「わしが、毎日、パチンコ、麻雀、酒浸りしてる（現在進行形）の  
が、悪いのかなー」

そう言う店主を見て、大人ってなんなんだ…、と有希は思った。

更に、店主は…。

「思えば、奴が初めて、ここへ来たとき…。」  
と、頼んでもないのに、勝手に回想を始めた。

あれは、ちょうど、半年前だったそう…。この頃には、紅美は、すでに店に居候していたそう…。

当時、店に借金を取りに来ていたのが、細くてガリガリの弱そうなヤクザだったんで、店主が小指一本で…。

「今度、払うって言ってんだろー！！去れ、この野郎！！！」  
と、逆ギレして、あしらっていたそう…。

それで、あまりにも払わないで居たら、一カ月後、借金の取り立て人が、赤井に代わってしまったそう…。

さすがの店主も、巨漢で筋肉質の赤井が、店に借金を取りに来た時は恐怖した。

「払えよ、ジジイ…。」

威圧をかけて、赤井は店主を睨んだそう…。

(いよいよ、俺も借金払わなければならぬ時が来たのか…)

と、店主は思ったそう…。(なにか、おかしいが気にしない) そんなとき…。

「いらっしやいませー」

と、赤井を客だと見誤り、空気が読めず、あいさつしてしまった紅美が、赤井の前に現れた。

すると…。

「いらっしやいました…。」

急に、赤井の態度が変化した。おかげで、借金の返済を先延ばし

してもらい、奴は、それ以来、毎日来るようになってしまったそう  
な…。

「…」

そんな話を聞いた有希は…。

(えっ、それだけ…?)

と、思った…。

そして、店主も金返せよ…、と心底思った…。

返済その6「若さを若さってなんだ？振り向かないことさ！」

「えっ。映画ですか？」

有希は、店の手伝いを終え、茶の間でテレビを見ながら、紅美の夕食の支度を手伝っていた。そのときに、紅美から、明日の土曜に映画を観に行かないかと誘われたのだ。

「はい、行きますよ！」

と、有希は満面の笑顔で返答した。

「そう、良かったー」

紅美は、茶の間のテーブルに皿を置きながら言う。

「それで、観る映画のタイトルは？」

美人の従姉の紅美と、映画を観るのだ。どんな内容でも観てやるよ！と、有希は意気込んだ。

「明日公開の『血まみれで、リアルでグロテスクなゾンビ達が、街の人々に襲い掛かる』って映画よ」

この内容が一瞬でわかる映画のタイトルで、有希は、行くのをやめようか悩んだ。

ちなみに、紅美は、この映画『血まみれで、リアルでグロテスクなゾンビ達』シリーズが好きだった。

翌日の夕方。

今日は店の手伝いを休んで、街の映画館まで、二人は歩いて向かっていた。

いろいろ考えたが、結局、有希は行くことになった。まあ、気晴らしになるだろうと思ったのだろう（気晴らしになるか、わからん内容の映画だが）

なんだかんだで、有希は映画を観るのが、久しぶりだし、ホラー映画なら苦手でないし、むしろ、絶叫シーンで紅美が驚いて、自分に抱きついてくるんじゃないだろうか…。と邪推していた。

「あつ、着いたよ」

と、紅美の声が有希の邪推を吹き飛ばした。

「あつ、はい！」

その声に、醒めた有希は映画館に目を向ける。  
すると…。

「やあ！紅美さんに、有希君じゃないか！」

大きな看板が目立つ映画館前に、何故か、あの巨漢アロハの赤井の姿があった…。

「ぎゃあーすー!!」

と、予期せぬ人物の登場で、有希は大きな奇声を上げた。

「あつ、赤井さんだー」

無邪気に紅美は、赤井に手を振って挨拶をする。

「いやー、僕も映画を観ようと思ってきたんですよー。ハハハ!!」  
相変わらずの羊被った振る舞いで、赤井は紅美と話す。

(何故、奴がいるんだ!?)

有希は、そう思った。

理由は簡単だ。さつき、店に赤井が来た。だが、紅美が居なかったので、店主に居所を(なかば、恐喝で)聞いたら、あつさり教えてもらったからだ。

それで、彼はバイクを飛ばして、駐車禁止区域に駐輪させてから、ここへ来たのだ。

「いやー、で、なんの映画観るんですか？」

と、紅美の横をキープしながら、奴は紳士的に振る舞う。

(一緒に、観る気かよ！)

有希は、言葉に出さずにツッコむ。

「えーと、ですねー」

紅美に断る気配が、見えなかった。えー、一緒に観るのー！？と、有希は思った。

「血まみれで、リアルでグロテスクなゾンビ達が、街の人々に襲い掛かる』って、映画ですよ」

それを聞いた瞬間、赤井の顔が青くなった。

「えっ、ホラー映画観るんですか…」

奴の勢いが止まった。小刻みに、足が震えている。

「あつ、あの、こっちの劇場版、仮面ライダー 王にしません…。面白いですよ…」

映画を代えようと、奴は勧め始めたが、時は遅く、あの映画が始まるうとしていた。

で、結局、赤井も一緒に、ゾンビ映画を観ることにした…。奴の顔が、だんだん、凍り付いていく。血の気を感じない青い顔になっていた。

(まさか、この人…)

赤井の様子で、有希は、気付いた。

上映終了後。

映画館の前で、サイレンが鳴り響いた。

救急隊員が、映画を観てる最中に、恐怖のあまり、失神してしまった赤井の巨体を運んでいく。あの巨漢が、白目を向いて泡を吹いている。

そう、奴はホラー映画が苦手だった。

なのに、観てしまったのは、紅美が居るからだ…。

極彩タップス

有希は、そんな奴の生き様に苦笑いするしか出来なかった…。

## 返済その7「動き出せば、クライマックス」

有希は、ここ数日、幸せだった。

何故なら、ここ最近、赤井が店に現れなくなった（奴が、前回の失態のせいで、紅美の前に現れるのが恥ずかしくなったから）

おかげで、店主の顔色やら、血色、肌の張りが五十代とは思えないくらい良かった。

二人は、このまま、奴が現れなくなれば、死と隣り合わせの毎日が終わる（本当は、借金を返済し終われば現れなくなる）と思っていた…、が…。

ある日、有希は買い物をしに、街に出ていた。赤井と、しばらく会わなかったせいか、ハイテンションで、スキップしながら、街中を歩く。

「いやー、今日は、なんて天気が良いんだー!!」

と、曇り空なのに、彼ははしゃぐ。よほど、赤井が居ないのが、嬉しいと感じていた。

ドン！

ハシヤギまくってスキップしたせいか、有希は、対向から来た人にぶつかってしまった。

「あっ、すみません…」

小心者の有希は、即座に謝る。そして、ぶつかった人の顔を見ようとした。どうやら、背の高い男のようだ。

「ぶっ!!」

ていうか、有希がぶつかったのは、不幸の象徴である赤井秀人だった。

「やあ、福梨君…。俺…、参上…」

と、ハシヤギまくつてる有希を睨みながら、赤井が挨拶をする。なにやら、機嫌の悪そうな顔をしている。たぶん、しばらく、紅美に会わないでいたから、精神が不安定になっていたのだろう…。

有希は、好きなグラビアアイドルが水着を卒業したとき並に、絶望の淵に立たされた。

というわけで、何故か、二人は近くの喫茶店に入り、（有希のお金で）お茶をすることに。

前回の失態を気にしている赤井は、無言で、チョコレートパフェを食べる。有希は、『怖い顔の人って、喋らないと余計に怖い』と言うことに気付いた。

（やばいな…。なんか、話さない…）

そう思った有希は、とりあえず、この気まずい空気を消そうと努力することに。

「えーと、赤井さん…。好きな仮面ライダーは、なんですか？」

と、精一杯の話題で、有希は赤井に話し掛けた。  
すると…。

「ああ？」

と、血管が走った表情で返された…。

どうやら、本気で機嫌が悪いらしい。有希は、身の危険を感じた。（うわー、メチャクチャ機嫌悪そうだよ、この人！！もしかして、ウトラマン派だったのかな…）

ハッピーから、絶望に墜ちた有希の思考回路は、メチャクチャになっっていた。

だが、しばらくして…。

「おい、福梨…」

「えっ、はい！（呼び捨て！？）」

赤井の方から、話し掛けてきた。

「こないだの映画の件だが…。紅美さん、なんか、言ってたか…」  
と、前回の失態についての紅美の反応を聞いてきた。やはり、かなり気にしているようだ。

「えっ…。紅美さんは、『赤井さん、体調悪かったのかしら…』って、心配してました…」

と、有希が言うと…。

「本当か！」

沈黙していた赤井が、立ち上がった。

「ええ…。本当に言っていましたよ…」

「よっしゃー！！」

そう聞くと、赤井はガッツポーズをして喜んだ。

確かに、紅美本人が言ったのだ。嘘ではない。

(もしかして、紅美さんも…。赤井さんに、気があるのかな…)

と、有希は思ってしまった。彼女は、赤井をあくまで客の一人でしか見てないと、有希は思っていたが…。

しかし、紅美のその一言で立ち直り、無邪気に喜ぶ赤井を、本当は純粹で、いい人なのかも…。と、有希は見る目を変えた。

翌日から、赤井は、また店に顔を出し始めた。

赤井は、笑顔で紅美と話す。紅美も、笑顔で赤井と話している。

そんな二人の様子を遠くから、有希は見つめた。どこか、嫉妬混じりで、赤井を見つめていた。

「なんで、紅美さん。あんな人に優しいんだろ…」

「ありがとございましたー」

しばらくして、食事を終えた赤井は店から去った。

彼が去ったテーブルの食器を片付けながら、紅美は…。

「そっいえば、いつになったら、赤井さん…。お会計、払ってくれ

るのかしら……。ここに来てから、一回も払ってくれないな……」  
と、言った。

「払ってねえのかよ！あの野郎！！」

有希は、今度から、人を見る目を厳しくしようと思った。  
所詮、悪人は悪人だ……。

返済その8「祭りじゃ、祭りじゃあ。毎日、祭りだったら、体が持たないぜ！」

ある日、有希は見てしまった。

赤井の姿を。ただ、通っただけの街中の古い屋敷の前。奴は、屋敷の前で年寄りの襟首を、乱暴に握っていた。

いつものように、紅美さんの前で、デレデレしている奴の姿ではなかった。初めて、奴と会ったときの第一印象そのままの奴だった。「払えつて、言っただろうう！聞こえねえのか、ジジイ！！」

間違はなく、奴の声だ。

「堪忍して下さい！！」

屋敷の主であろう老人が、怯え叫ぶ。きつと、あの老人も奴の事務所から、借金をしてしまったのだろう。

怖くて、有希は奴に近付けられなかった。

「その指、折ってやろうか！？ああ！？」

そう叫ぶ奴を見て、有希は思った。

どんなに、紅美さんの前でバカ丸出しで、ホラー映画に弱くても…。奴は、所詮、血と涙を感じさせない『ヤクザの借金取り』なんだと…。

そして、奴は老人を脅すだけ脅し、去って行った。

有希は、足が震えていた。

『あれが、奴の本性なんだ…』

同じ日の晩に、奴は店に現れた。

「いやー、こんばんはー！」

さつきとは、別人のように明るく奴が現れる。紅美狙いで。

しかし、今日、紅美は友達と飲み会に行っていない。店に居るのは、店主と有希だけ。

有希は、店主にさつきの事柄を話してはいない。

「今日は、紅美ちゃんは居ねえよ…」

店主が、そう言う。

「えっ、居ないのかよ…」

残念そうに、奴は言う。

「じゃあ、仕方ない…。いつもの鯖味噌な。あと、水くれ」

奴が席に悠々と座り、店主に注文をした。

「…」

有希は昼間に見た、あの光景が目から離れなかった。あの時の赤井の姿が、今日の前に居る赤井の姿と重なっていた。

すると、なんだか、有希に怒りが込み上げてきた。

「おい、水くれ！。福梨！」

奴が名指しで、有希を呼んだ。

それに答えるように、有希は片手に水の入ったグラスを持って、奴に近づいた。

「つたく、親父さん、福梨も、さっさと金返せよ！。こっちも、不景気なんだから！」

その一言で、有希の頭に、あの老人のことが浮かんだ。

すると、有希の頭の中で、なにかがキレた。

バシヤツ！！

「ふざけんな！！」

有希は、持っていたグラスの中の水を、赤井に思いっきりかけた。

赤井の顔が水に濡れ、シャツが、びしょびしょになっていた。

「なっ！？」

これには、厨房に居た店主が口を開けて驚いた。同じく、水をかけられた赤井も。

「なにすんだ！てめー！！」

迫力はなく、奴は座りながらも、怒り気味に叫んだ。

「あんた！紅美さんが居るから、店主と僕には優しいけど…、あん

な、お年寄りに、あんな、ひどい脅しして借金返させようとするのかよー！」

有希も負けずに叫んだ。

その言葉で、赤井は今日の昼間のことを思い出す。

「なんで、お前が、それ知ってたんだよ…」

赤井は聞くが、頭に血が昇り上がった有希は、聞く耳を持たなかった。

「うるさい！なんで、紅美さん居る時みたいに、あの年寄りに優しくしないんだよ！あんな、最低だよ！！！」

と、有希は言いたい放題言った。

赤井は、それを黙って聞くと、そのまま、席を立って店から去った。

店主の顔からは、血の気が引いていた。

そして、閉店の時間になったので店を締め、紅美が居ない茶の間に、有希と店主が居た。

今日あった事柄すべてを、店主がビール飲みながら、有希から聞いた。有希は、言いすぎたと思いつつも、まだ怒りが消えなかった。

「確かに、奴はヤクザだしな…。一応…。俺たちには、優しくしてるが、か弱い老人を脅してる姿を見ちまえば、奴に失望するのも無理はないな…」

と、店主はタバコをくわえながら言う。

「だけどな…。人が人を嫌いになるのは、そいつを好きにならなきゃ、嫌いにはならないし、嫌いにならなきゃ、そいつを好きにはなれないぞ」

と、店主が言う。

だが、有希には意味が解らなかった。

翌日の昼間。

買い物帰りに、喫茶店に寄って、アイスコーヒーを飲んでいた有希は、耳を疑った。

昨日、奴が脅していた老人が有希の後ろの席に、友人達と座っていた。

あの老人は、高笑いだった。

「楽勝よ、赤井の奴なんざ。あいつはガタイがいいから、怖く見えるだけのアマチャンよ。とりあえず、泣いて謝ってれば、手も出さないで、金も取らずに引いてくれるしよ。あいつだったら、死ぬまで、借金返さずに済みそうだぜ」

その老人の言葉が、有希の胸の奥を、まるで鋭利なナイフで、何度も刺すように貫いて行く。有希は、まだグラスに残っているアイスコーヒーが、喉を通らなくなっていた。

それでも、老人の言葉が耳に入り込む。

「知ってるか？赤井の奴、借金の回収が悪いから、組の幹部から、ひでえ目にあってるらしいぜ。それでも、無事で居るから、バケモンだな、あいつー」

「あと、ろくに組からも、金貰えてないから、極貧生活だつてよ。飯も、ろくに食ってないらしいぜ」

だから、奴は店の会計が払えないのか…。

「まあ、おかげで、俺は借金返さずに、ギャンブル出来るわけよ、ハハハ！」

有希は、アイスコーヒーを残して、フラフラと店から去った。

老人に対しての怒りより、先走ってしまった自分の青さと、赤井が見た目には解らないくらいに、辛い目にあっているという事実、胸が詰まって涙がこぼれた。

赤井は、公園のベンチに座っていた。そして、木々を和やかに見

つめていた。

そんな彼を、有希は見つけた。有希は、息を切らしていた。走つてまで、赤井を探していた。

「ん？」

赤井も、有希を見つけた。そして、汗だらけの有希を黙認したまま、視線を、また木々に変えた

有希は走つてまで、赤井を見つけたのは、謝りたかったからである。なのに、言葉が出なかった。彼のことを、必要以上に知ってしまったからだ。

だから、なにも言えなかった。  
が…。

「ああー、腹減ったー。どっかの馬鹿のせいで、メシ食いそびれたしー」

赤井が、そう言った。

有希は、ポカーンとした。

「さてと、紅美さんとこに、メシ食い行くかなー」

と、ベンチから立ち上がった赤井が有希に近づいた。

「なに、ぼーっ、としてんだ。さっさと、紅美さんの手伝いしろ。バカ！」

そう言つて、有希の背中を叩いた。何事もなかったように。

思わず、有希の目から涙が、またこぼれてしまった。

「すみませんでした…」

泣きながら、有希は謝った。  
すると…。

「いいから、早く手伝いしろ」

そう言つて、赤井は有希の背中を、また叩いた。

「あと…」

赤井は、なにかを言おうとした。それで、右腕を大きく振りかぶ

り…。

バゴツ！

有希の顔面を思いっきり、ぶん殴った。

「昨日のお水、冷たかったぞ…。バカヤロウ…。すみませんって、レベルじゃねえぞ…」

実は、かなり根に持っていた赤井は気が済まなかったらしく、有希を殴り飛ばした…。

有希は、ぶん殴られながら思った。

『やっぱり、こいつは最悪だ』

と…。

返済その9「全力で、僕は僕の波を信じる」

本日は、店主の機嫌が悪かった。その機嫌の悪さは、店内に居る有希、紅美、赤井が見ただけで解るくらいだった。

「なにが、あつたんすか？」

と、赤井が紅美に聞いた。

「なんでも、近くに安くて美味しいイタリアンレストランが出来たんですって…。それで、お客さんが不入りで…」

と、紅美は店主のイライラの理由を教えた。

「そうなんですか…」

赤井と同じく、店主のイライラの理由を知らなかった有希は頷く。

「だからって、なんで、僕があんたと一緒に、そのレストランに、偵察行かなきゃならないんですか!!」

と、何故か、有希は赤井と一緒にライバル店の前に居た。

「仕方ないだろ…。俺だって、紅美さんと行きたくったわ…」

赤井は、『色彩園』の会計を払ってないのを店主に脅されたのと、紅美からの頼みで、ライバル店のイタリアンレストラン、『イスルギ』に、有希と偵察に行くことに。ちなみに、紅美は店主と一緒に店番。

「ていうか、店主はあんたから借金してるのに、逆にあんたが脅されて、どうするんですか!？」

ツッコミだしたら、キリがなくなるので、赤井は有希を無視して、レストランへと向かう。

レストランの前は、女子高生から、若い女性、ビップのオバサマ方までと、多くの女性が並んでいた。その列に、有希と赤井も並んだ。

「なんだか、やけに女性が多いですね…」

「ああ、そうだな…」

赤井は、紅美から渡されたレストラン『イスルギ』の広告チラシを見た。

チラシには…、『イケメンだらけのイケメンレストラン』と大きく書かれていた。さらには、『イケメンシェフが料理を作り、イケメンスタッフ達が料理を運ぶ。あなた方も、彼らに釣られてみない？』と書かれていた。

有希、赤井はチラシを苦笑いで読んだ。

「なんだ、このホストクラブの宣伝みたいな煽り文句…」

と、赤井がツツコンでる間に列は進み、いつのまにか、もうレストラン店内に入っていた。

レストランは、婦人方の高笑いが響き渡り、色彩園とは比べるのも申し訳ないくらいに優雅な作りの室内であった。そして、ホストクラブのごとく、店員達がイケメンだらけだった。

有希、赤井は妙に息苦しくなってきた。

空いた席を案内され、座った有希、赤井の元にメニュー表を持ってきたイケメンの店員が現れた。

店員は、赤井よりは低いがスラツとした細身の長身で、髪の毛は嫌味にならないサラサラの爽やかな長髪眼鏡の美青年だった。

「ようこそ、イケメンレストラン『イスルギ』へ…。わたくし、イケメン店員の青木龍聖と申します」

と、柔らかなで優しい声で挨拶をし、二人にメニュー表を渡した。そんな彼のイケメン具合に、男の有希までも、たじたじになってしまった。

（自分でイケメン言ってるけど、確かに、イケメンや！！名前までカッコイイ！！）

と、有希は心の中で叫んだ。何故か、興奮していた。

（ああ、りゅうせい…。そんなタイトルのロボアニメあったよな…。確か、必殺技が、V・MAX…）

赤井は、別のことを考えていた。

「えーと、なにか、オススメは…」

メニュー表を渡されても、イタリア料理に詳しくない有希は店員の青木龍聖に、オススメを聞いた。

「オススメですね…。オススメは…」

と、青木は眼鏡を、くいつ！と上げた。その仕草まで、カツコイイ！と有希は興奮した。

もしかしたら、有希はB.Lツ気があるのかもしれない。

赤井は、80年代のロボアニメについて考えていた。

「オススメは、まず、イケメンシェフである浦太郎うらたろう氏が、手塩に掛けて作った『ベーコン・レタス』の和え物ですね」

どーでもいいが、『ベーコン・レタス』を略すと、『B・L』。

## 返済その10「働こうぜ、ダブルアクション」

前回までの話。

もしかしたら、有希はアツチ系なのかもしれない。

そんな危険な果実の虜になりそうになっている有希の隣の席で、

赤井は『ロボアニメ、聖戦士ダ バインの終盤で、ビルバンの色が、赤から迷彩色に変わった理由』を、真剣に考えていた。

赤井が、正気に戻った頃、『ベーコン・レタス』のサラダやら、『カルボナーラ』やら、有希が頼んだ『イカスミのパスタ』など、いろいろないタリアン料理が、イケメン店員の青木龍聖の手から運ばれていた。

「うほっ！美味そうな、ベーコン・レタスだぜい！！」

さっきから、何故か、やけに楽しそうな有希は運ばれてきたイタリアン料理に、大興奮だった。

「それでは、ごゆっくり…」

と、青木が去ろうとした時。

「まちやがれ！！」

と、赤井は叫んだ。

「ん！」

その声に驚いた青木は、思わず、足を止めた。同じくして、いきなりの大声に、ベーコン・レタスを食べようとしていた有希の動きが止まった。

「いかなされました、お客様？」

と、赤井の席まで青木は寄る。赤井の顔は、静かな怒りに燃えるような表情だった。

「貴様、こんなものを客に出すのか…」

赤井は出された料理の皿を見て、そう言う。彼は、なにかに不満を持っていた。

「お客様、なにか、ご不満でも…?」

青木は、赤井のクレームを聞き取るうとしていた。

しかし…。

「見て解らねえのかよ…」

と、赤井は冷たく言い捨てる。

そう言われ、青木は自らが出した料理の品々を見た。が、やはり、なにが不満なのか解らない。同じく有希も。

「赤井さん、なにが、不満なんだよ!」

そう有希が聞いても、赤井は、なにも喋らなかった。

(なにが、不満なんだ?このお客は…。『見て解らないのか?』だと…?)

と、青木は再び、自らが出した料理の品々を見る。そして、赤井のクレームについて、細かく思考を走らせた。

(皿が汚れていた?いや、ソースなどによる、汚れは拭いた…。

オーダーミスはない…。

なにより、この赤井とかいう男は、オーダーを同席の少年に任せていた…。

提供時間も、問題はないはず…。

むしろ、早かったはずだ。

料理に、異物が入ったのか…?入ってたとしても、見て解るのは、提供前に、こつちで確認できたし、食べてからじゃないと、異物の確認は出来ないはずだ…。じゃあ、なんだ?なにが、不満なんだ?盛り付けが、不満なのか?いや、そんなクレームは、今までなかった…。それに…(さすがに、長いので省略します)

さまざまな思考を張った青木だが、自分の落ち度が見当たらなく、まったく持って、赤井の無言のクレームが解らない。

「見ても、解らないのか…」

と言つて、赤井は立ち上がった。

「お客様、不満があるのでしたら、教えてもらえませんか？  
？なんだつたら、商品をお取り替します」

青木は冷静に、赤井を静めようと努力していたが…。

「見て解らないのなら、言つたつて仕方ないだろうが…。考えな…。  
マニュアル通りの接客なんて、この程度か…。字数と、展開の都合  
と、作者の都合で去るぞ、有希…」

そう冷たく言い放ち、赤井は席から去る。有希は、残念そうな表情をして、店から離れていく赤井の背中を追う。

「僕の接客が、マニュアル通りで中身の無い、形だけの接客だつて…。」

二人が去つた席にある料理の品々を見ながら、青木は赤井に言われた言葉を噛み締めた。

「で、なにが不満だつたんですか！？赤井さん！！」

楽しみにしていた料理が食べられなくて、有希は怒り心頭に、赤井にクレームの内容を聞いた。

それに対し、赤井は…。

「あんにやろう、墨汁のぶつかかったスパゲッティ出しやがって…。  
普通、食えるか、あんなもん。なんで、あんな墨汁かかった奴を客に出すんだよ」

有希は、その赤井の発言を聞いて固まった。

赤井が言っているのは、『イカスミのパスタ』のことだった。

「赤井さん…、あれ、イカスミソースのパスタで、普通に食べられるんですよ…」

有希が、そう言つと、赤井の顔が固まった。

## 極彩タップス

赤井秀人は、パスタの種類を、ミートソースとナポリタンしか知らなかった。

返済その11「君は見たか？愛が真つ赤に、燃えるのを」

前回までの話。

赤井秀人は、幼少から貧しい暮らしだったため、パスタの種類を、ミートソースとナポリタンしか知らなかった。しかも、ナポリタンは、本場ナポリのパスタだと勘違いしていた（ナポリタンは、日本で出来ました）

そのため、イカスミソースのパスタを、墨汁ぶっかけパスタと、罰ゲーム等で食べさせる物だと思っていたが故に、イケメン店員、青木龍聖に、あらぬ事を言って去ってしまった。

さすがの赤井も、罪悪感で一杯。果たして、赤井は青木に謝罪できるのか？

そして、吉 家がラーメン業界に進出したわけとは！？

本日の営業が終わった青木は、夜空の街を、ふらふらと歩く。

「はあ……」

と、一息ため息を吐く。かなり落ち込んでいる様子だった。理由は、今日、赤井に言われた一言だった。

（『マニュアル通りで、中身のない接客』か……）

その言葉が、彼の胸に突き刺さっていた。

青木龍聖、21歳は、イタリアからの帰国子女であり、彼の夢は料理人になることであった。そのため、イタリア料理界の雄、『浦太郎』の元、料理修業に努めていた。その努力もあって、青木のイタリア料理の腕前は、プロ並で絶賛の嵐であった。

そして、浦太郎が新しい店『イスルギ』を出店する際には、彼がメインのシェフになるはずであった。

が、浦太郎は、青木の腕前を知りながら、彼をホールの接客に回したのだった。

この配慮に、青木は浦太郎に不満の声を上げた。

「何故、僕がキッチンではなく、ホールなのですか！」

その声に、浦太郎は…。

「君の腕は知っている…。だが、君には接客を知る必要がある…。だから、あえて、ホールに回した」

と、言い放った。

しかし、それでも、青木は納得することが出来なかった。だが、仕方なく、浦太郎の言うとおり、彼はホールに就いた。

（なんで、僕がホールなんだよ…）

と、彼は浦太郎の真意が解らなかった。

ちなみに、浦太郎の真意は、ホールの人出が足りなかったから、あみだくじで、人の足りてるキッチンからホールに回す人を決めたら、青木に決まったとのことだ。

天才肌の青木は、マニュアル通りに接客をこなし、容姿の良さから客を魅了してきた。だが、彼は満たされない気持ちでいた。

そんな気持ちでいた今日、赤井から、あの言葉を言われたのであった。

そんなことを考えながら、彼は腹が減ったので、通りかかった定食屋で食事を済ますことにした。

「いらつしやいませー」

と、女性の声が彼を迎えた。

青木が入ったのは、色彩園だった。

返済その12「信じる奴が、ジャスティス！！だから、俺を信じて、金貸してー

」で、どーするんですか？赤井さん？」

青木が店に来る数分前……。前回、一文字も名前が出なかつた主人公、借金してる側の有希が、店内で借金されてる側の赤井を責めていた。

「『イメン・パラダイス』での、仮面ライダーカトは……」

「だから、どう謝罪する気ですか」

赤井は話をすり替えようとしたが、目に見えぬスピードを超えるモーションで、有希は話を戻す。

「有希……。どうしても、謝らなきゃならないのか？」

「答えは、聞いてない」

と話している間、青木が現れ、本編スタート。

「あなたは、今日の……」

と、たまたま入った色彩園の店内に居た赤井と有希に、青木は驚いた。赤井と有希の方は、もっと驚いていた。二人に驚きつつも、青木は静かに席に着く。

紅美が笑顔で、水を彼の席に静かに丁寧に置いた。

(……！)

その水の置き方を見て、青木の体に電気が走った。

「ご注文が決まったら、呼んでください」

と、紅美は青木に言う。

「あつ、はい……」

青木は、彼女の水の置き方の丁寧さに驚愕していた。

(座つたと同時に、水を置き、しかも、単純に水を置いたように見えて、その実、事細やかで丁寧な水の置き方……！しかも、グラスの水滴が不快にならないレベルに滴れている……。そして、なにより、

人を労りつつも、癒している笑顔…)

と、ただ紅美は普通に水を置いただけなのに、青木は、キムチと納豆が合うのを発見した時のような感動に襲われた。

赤井と有希は、なんて謝罪を言うべきか、真剣に口論を小声で始めていた。

(どうすんだよ！有希！？)

(とりあえず、謝りなさいよ！)

(ていうか、なんで、あいつが居る！？)

(知らないよ！！)

(ていうか、有希のくせに生意気だぞ！！)

(なに、そのジャ アンイズム！？あんたが、イカスミでキレたのが、悪いんだろ！！？)

(S A T T U G A Iするぞ！クソガキ！！)

(なんだと、この赤いひでえ人！！)

と、口論になっていた。

しかし、青木の方は、紅美の接客対応に関心を示し、感動していて、二人のことなんて忘れていた。

しばらくして、青木が注文した生姜焼き定食を、紅美が運ぼうとしていた。その彼女の動きを、青木は凝視していた。

彼女は、皿の汚れを綺麗なハンカチで拭き取り、ご飯をちよつと多めに盛り付けていた。そんな彼女の動きを見て、青木は過剰なまでに感動した。

(なんて、繊細で柔らかかな心遣いなんだ！！)

青木は、目から鱗だった。やっていることは、普通なんだが、美人の紅美のエフェクトが掛かり、物凄い気配りに見えていた。

同時に、今日までの自分の接客に嘆いた。

(確かに、僕はホールの仕事なんか、やりたくなかった…。だが、仕事だと割り切って、とりあえずは、マニュアル通りにやってみた

…。しかし、そんな形だけでやる接客など、機械がやることだ！）  
なんか、青木は勝手に自分を責め始めた。たぶん、学生時代のテスト期間中も、こんな感じで乗り越えてきたのだろう。

（『客に接する』と書いて、『接客』…。『接客』は、客に料理を運ぶだけじゃなく、客にシェフの心を運ぶ役割だったのか！）

と、なんか勝手に結論を出し始め、さらには、涙すら流し始めた。僕は勘違いしていた…。料理は、シェフが魂を込めて作るものだと。だが、運ぶ人間が居なければ、料理は客に届かない。料理どころか、シェフの魂まで！！そうか！浦太郎さん、赤井とか言う名前の人は、このことを、僕に知ってほしかったのか！！）

あみだくじの結果で回されたのと、イカスミを墨汁と間違えたのを、今の彼が知ったら、どうなるのだろうか。

（時を越えろ！空を駆ける！この星のため！！）

（熱く燃やせ！涙、流せ！明日という日に！！）

（仮面ラダー…）

（ブラック！！）

と未だに、赤井と有希は、互いの襟首を握りながらの口論は続いていた。だが、もはや、口論ではなくなっていた。

「どうぞ、熱いので、気を付けて…」

紅美が、青木の席に生姜焼き定食を丁寧に置いた。その時…。

ガシィ！！

「えっ？」

青木は、いきなり紅美の細く柔らかい手を握った。これには、紅美は驚く。

「感動しました…。僕を、ここで働かせて下さい…！」

紅美の接客に感動しすぎたあまり、料理を食べてもいないで、い

きなり、青木は発言した。

それに対し、紅美は…。

「いいですよ」

店主に相談もせず、独断し、笑顔で彼の懇願を聞き受けた。

「こぼれ落ちる砂のように」

「誰も時、止められない」

新たな恋のライバルの出現なのかもしれないのに、赤井と有希は、この状況に気付かず、未だ口論と言う名のデュエットを続けていた。

「その運命侵す者」

「僕が、」

「俺が、」

『消してみせるー、必ずー!!』

果たして、青木龍聖と言う名の、その運命侵す者を二人は消せるのか。

### 返済その13「暴力は良くない!と言った、キレやすいニュータイプ」

現在、福梨有希(16)を悩ます者リスト。

一人目、赤井秀人(27)。職業は、借金取り。長所なし。短所、知らず知らずに人を不幸にする。

二人目、青木龍聖(21)。職業、飲食業。短所、知らず知らずに不幸になっていく。長所、イタリア料理と、不幸な現実を受け流すのが上手い。金持ちで、イケメン。

果たして、彼等以上に、彼を悩ます者は現れるのだろうか。

ある日、有希が頼まれた買い物を終えて、色彩園の店前まで来ていると…。青いカラーのフェアレディZ(初代)が、店の駐車場に駐車されていた。

これには、車好きの有希は興奮した。

「すげー!!ヤンマガで、お馴染みの『悪魔のZ』だ!!すげー!!誰んだー!!」

かなり綺麗な状態で、凝ったセッティングがされているフェアレディに、有希は大興奮。

「僕のだよ…」

と、有希の背中から柔らかな男の声が聞こえた。その声に、有希が振り向くと、そこには青木が居た。

本日から、色彩園で働くことになった彼は、勤めていたイタリアンレストラン『イスルギ』を辞め、自宅の高級マンションから車でここまで通うことにしていた。

明らかに、色彩園よりイスルギの方が給料が良いのだが、なにかを勘違いした彼は、色彩園に勤めることに。ちなみに、あみだくじの事実と、イカスミの真実を、未だ知らないで居る。むしろ、知ら

ない方が幸せである。

彼が、紅美の接客に感動したのは解るが、紅美に対して恋愛感情があるのかは、有希は解らなかった。

「隣、乗ってみる？」

と、青木はクールに車に誘う。

「まじっすか！」

有希は、鼻水を吹き出すくらいに興奮して喜んだ。

青いフェアレディは、二人を乗せ、首都高速を駆け抜けていた。青木の青いフェアレディは、古い型であるのに、新型に負けない加速とスピードを放ち、次々と、首都高速道路を走る、走り屋たちのランエボ、インプレッサ、テスタロッサなどを越していく。

青木は、料理だけではなく、自動車工学についても詳しく、ドライビングテクニクも完璧だった。

「すげー！！すげよー！青木さん！！！」

と、赤井と居る時とは逆なくらい有希は、ハシヤイだ。

「はは、大したことないよ、これくらい」

格好良く青木は、言い放つ。その青木に、有希はもうメロメロだった。

そして、同時に、有希の脳裏に、こないだの出来事が思い出される。

昨日…。

「有希じゃねえか」

と、街中を歩いていた有希の後ろから、半帽ヘルメットを被った赤井が、赤いカラーリングのゼファー1100に乗って現れた。

オタクの有希は、やはり、赤井の乗るゼファーにも興奮していた。  
「ケツに、乗ってみるか？」

と、赤井に言われ、迷う事無く有希は、ゼファーのタンデムにまたがった。思えば、これが不幸の始まりだった。

「で、どーなったの？」

と、青木が有希の話に相づちを打った。有希は、悲しそうな顔を  
して…。

「乗ってる途中、赤井さんが飛ばしまくるから、振り落とされました…」

有希は、涙ながらに語った。青木は、苦い顔をした。

「川越街道をバカみたいに飛ばすから、振り落とされて、地面に叩きつけられて、最悪ですよ！！しかも、あの人、僕が振り落とされてんの、家に帰るまで、気付かないで居たんですよ！あいつ、人間じゃないですよ！！」

と、有希は、感情を爆発させて話す。

青木は、昨日、振り落とされて地面に叩きつけられたのに、骨も折れてないどころか、傷一つ負ってない有希の回復力の方が、人間じゃないと思っていた。

次回予告。

「ぎゃあああああ！！！！」

赤井は、どうやっても止めることが出来なかった。

「…」

顔がその名の通り、青く染まっていく青木…。

「なんで、そう簡単に無意識に人を傷つけるんだよ！！！！」

有希は、大きな涙を浮かべ叫び狂った。有希は、残骸となったフェアレディZのヘッドライトを抱くしか出来なかった。

次回、機動戦士フェアレディズ。  
『フェアレディズが、どっかのバカのせいで大破する』。  
君は、刻の涙を見る…。

返済その13「暴力は良くない!」と言った、キレやすいニュータイプ」(後書き)  
今回のサブタイトルと、内容は、次回予告通りにならない場合があります。

返済その14「フェアレディと過ごした日々を、この胸に焼き付けよう」

「すまなかった…」

赤井は青木に、ふわふわとした生地の中に、甘すぎない程よくクリームが隠された仙台の銘菓『萩の月』を渡した。

放心状態で、店内の椅子に座り込む青木は…。

「ああ、いいです…。僕、気にしてませんから…。ははは…」  
と、半ば精神崩壊気味に笑っていた。

そんな二人のやりとりを、有希は悲しい顔で見つめていた。

なぜ、こんな状況になったのたか…。

それは、返済その13に、物語は遡る…。

首都高速ドライブを満喫した有希、青木は色彩園に戻った。すると、店の前には、あの例の赤いゼファーに乗った赤井が…。

「ええ車、乗ってるやんけ！」

そう言い、赤井は青木のフェアレディを運転させてくれと頼んだ。もちろん、人を疑うことを知らない青木は、快く承諾してしまった。

これが、後悔しても、後悔しきれない過ちの始まりだった…。

感の良い方なら、赤井がなにをしたか、もう、おわかりだろう…。

赤井は、大型自動二輪の免許は持っていたが、普通自動車の免許は持っていないかった…。しかも、大型自動二輪の免許があれば、普通自動車に乗ってもいいと勘違いしていた（乗れません）

だから、彼はブレーキとアクセル間違っつて、フェアレディのフロントを壁に、最終回のゼータガダムみたいに激突させてしまったのだ…。

あの時のフェアレディのボン！というエンジンの爆発音を、有希は忘れることは出来ない。むしろ、あの爆発音が耳鳴りのように、耳に響いた。

「時をかける少女（アニメの方）、面白かったよね…」  
青木が、あまりにも落ち込んでたから、その罪悪感で赤井は最近、借りたDVDの感想を有希に話した…。

なぜ、その映画の話をしたのか…。それは、赤井の『時間、戻してえ』という気持ちの顕れだった。だが、こぼれ落ちる砂のように、誰も時止められない。

色彩園の駐車場の壁に突き刺さったまま、放置された放置されたフェアレディの残骸を、二人は見つめていた。

「とりあえず、修理した方がいいかな…」  
と、赤井が言った。

だが、壁に突き刺さり、凹んだボディ、半壊したエンジンが修復の難しさを物語る。なにより、フェアレディのこの型の部品を見つけるのは至難の業である。

「無理ですよ…」  
有希は、すかさずに言う。

しかし…。  
「いや、案外、そうでもない…」  
と、赤井は口元に笑みを浮かべた。

なにかを思い立った赤井は、レッカー車を呼び出し、半壊のフェアレディを運び、有希を連れて、とある整備工場に向かった。

その整備工場の錆びれた看板には、『板金・塗装のゴウカ整備工場』と書かれていた。

誰も居ない、ひどくボロボロの工場内に、赤井と有希は、フェアレディと共に、足を踏み入れる。中は、工具や部品が散らばっていた。

「なんです、ここ…」

ガソリン、塗装臭い空気に、慣れない有希は鼻を抑える。

「ここは、一流の腕を持つチューナー、桃太郎ももたろうさんの居る板金屋だ…」

と、赤井は誇らしげに語る。

「彼は最高の整備と修理の腕を持つ…。彼は、俺の単車のエンジンの音を聞いただけで、一個のピストンが異常磨耗してたのを見抜いた…。さらには、馬鹿な走り屋が事故って、スクラップ同様になっていたケンメリのスカイラインを甦らせた男だ…」

それを聞いて、有希は驚いた。

「すげー！だったら、このフェアレディも！」

「ああ、前フリなしに、修理完了だぜ！！」

と、二人はフェアレディの復活の希望に喜んだ。

だが、一つ、予想外があった。

このあと、現れた伝説のチューナー、桃太郎が両腕複雑骨折していて、手にはギブスがされ、フェアレディなんか修理出来る状態ではなかったことだ。

この時、二人は口を揃えて、こう言った。

「時をかける少女、面白かったよね」

だが、こぼれ落ちる砂のように、誰も時を止められなかった。

返済その15「人は人を愛すると弱くなる。だが、それは本当の弱さではない」

前回までの話。

赤井は青木のフェアレディを破壊してしまい、修理しようと、伝説のチューナー、『鬼の桃太郎』に頼むが、彼の両腕はクライマックス状態で、フェアレディの修理なんか出来る状態ではなかった。果たして、フェアレディを直るのか!?

ちなみに、一番クライマックス状態なのは、青木だぜ!!

「俺、惨状…」

と、両腕複雑骨折の桃が二人の前に現れた。

「なんで、桃さんの両腕は、最初からクライマックスになってるんですか!?!」

ギブスに巻かれた桃の腕を見て、焦ってる赤井が叫ぶ。

「昨日、飲み屋に行ったら、近所の格闘道場『レッコウ』の館長、金太郎が酔って、俺の腕にアームロックかけてきて、ポキッ!つて…」

「格闘家のくせに、なに一般人に危害加えてんだ、そいつ!?!?」  
赤井は顔の知らない、金太郎を恨むしか、今は出来なかった…。

とりあえず、二人は工具の散らかっている工場で、桃に事情を話した。話したところで、どうにでもならないが…。

ちなみに、有希は『生まれて初めて、車が潰れる音を聞いたんだ…』と、少女漫画のポエムで語った。

「なるほど…。いつもの俺なら、あのフェアレディを直せるのだが…」

と、桃は自分の両腕のギブスを悔しそうに見つめた。

すると、赤井は…。

「桃さんの手が動けないなら、仕方ないです…。」  
さすがの彼も諦めモードかと思われた…、が…。

「なら、俺が桃さんの代わりに修理します。桃さんの指示どおりに俺が動いて、この車を直します。」

と、赤井が言った。

「なに!？」

有希、桃は同時に驚いた。いきなりの赤井の発言に、二人は目を見開いた。

直すと宣言した赤井本人は上着を脱ぎ、工場に投げ捨てられているツナギを着始めた。そんな彼を有希は、止めようとした。直せるわけがないと思ったからだ。

「無理だよ、赤井さん!支持どおりに直せるわけないじゃん!」

だが…。

「やってみなきゃ、わかんねえだろ」

と、赤井は言い去り、ツナギに着替え半壊したフェアレディに向かって行った。

その赤井の決意に有希は、なにも言えなかった。

こうして、すぐ様、両腕骨折の桃の代わりに、赤井がフェアレディの修復を始めた。

決意に打たれた桃は、赤井を指示した。赤井は、初めての修復作業を慣れていない不器用な手でやっていた。当然、スムーズに行くわけがなかった。

「バカヤロウ!そんな工具の使い方があるか!!!」

と、頭に血の昇りやすい桃が赤井の手際の悪さに、蹴りを入れた。だが、赤井は素直に謝り、また、作業をやり直す。

まだ、始まって二時間しか経ってないのに、赤井の顔やツナギは、オイルで汚れ始めた。さらには、その時間内に、かなり桃から蹴られ、殴られた。

有希は、そんな赤井に…。

「赤井さん。青木さんだつて、そこまでやれ、とは言いませんよ！  
桃さんの腕が治るまで、待ちましようよ！」

と、言ったが…。

「黙ってる！クソガキ！！てめえのケツ、てめえで拭いてるだけだ  
！！！」

と、赤井は言い返す。

その言葉に、有希はビクツ！と体を震わせた。赤井は、また作業  
を無言で始めた。

（この人は…）

元はと言えば、確かに赤井が悪い。

謝罪なんかは、金を払えば済むのが今の世の中だ。だが、赤井は  
金だけで済ませようとはしなかった。ちゃんと反省の気持ちを込め  
て、こんなにも真剣に、自分が壊してしまったフェアレディの修復  
を殴られながらも、取り組んでいる。

例え、詫びの金を払って、青木が許しても、赤井自身が自分を  
許すことが出来なかったのだ。

そんな彼の姿に、有希は…。

「赤井さんだけじゃ、不安ですから、僕も手伝います…。僕にも、  
フェアレディに乗る赤井さんを止めなかった責任がありますから…」  
そう言つて、有希も赤井と共に修復作業をやることにした。

そして、かなりの日にちを掛け、二人は毎日ボロボロになりなが  
らも、フェアレディの修復を進めて行く。

日に日に、ひどいポンコツだったフェアレディに、かつての輝き  
が戻って行き…、ついに！

「出来たー！！！」

赤井、有希、桃の三人は歓声を挙げた。  
とうとう、あの半壊していたフェアレディを元通りに修復したのだ。

これには、三人抱き合って喜びあった。だが、その際の勢い余って、桃の腕がまた折れた。

完成してすぐに、赤井は、青木を携帯で『ゴウカ整備工場』へ呼び出した。このまま、甦ったフェアレディを彼に返そうとした。

「ははは、あいつ、驚くだろうな！」

と、赤井が無邪気に笑った。つられて、有希も笑い声を挙げた…、が…、次の瞬間、二人の笑い声が止まった。

ブオン！ブオン！

激しい排気音が、ゴウカ整備工場に近づいてきた。

「…」

赤井、有希の笑いが止まった。そして、同時に嫌な予感が頭に浮かんだ。

工場に迫ってきた車を、二人は駆け足で見に行った。

工場から出て、外を見ると、ホンダがバブル時代に作った最高級スポーツポーター、青いNSXの姿…。フロントガラスの先には、青木の顔が…。

「えっ、フェアレディ直したんですか？別に、気にしてなかったのに…。むしろ、車買い替えるきっかけになったし。直さなくても良かったのに…」

と、新しい車から降り、二人の前に立った青木が言った。

その言葉に、赤井、有希の額に血管が浮かび上がり、拳には強烈な握力が走る。二人のフェアレディ修復の際の苦労、苦痛、疲労、喜びなどの感情が、すべて怒りに変換された。

青木は、NSXを撫でながら…。

「良かったら、そのフェアレディを、二人にあげましょうか？」

その一言で、青木は二人の強靱な握り拳を顔面に受けた。

このとき、青木は思った。

「次からは、車買い替える時は、一声掛けよう…」

とことん、知らず知らずに不幸を食らう男だった。

返済その16「一体、自分以外、誰の強さ信じられる？」

いきなりだが、有希は街中を歩いていたら、同い年くらいの不良の高校生、三人に絡まれ今、線路沿いの人通りの少ない金網フェンスに、有希は体を押しつけられていた。

「いや、本当に今、お金持ってないんすよ…。勘弁して下さい」襟首を不良に握られ、怯えながら、有希は話す。

「だったら、銀行行ってATM使って出してこいよ！じゃないと、痛い目見んぞ！」

と、不良の親玉が有希に殴りかかろうとした瞬間…。

「やめる…」

どこからか、第三者の声がした。

不良たちは殴るのをやめ、声の方に首を向けた。

すると、その先には、クセツ毛の金髪頭に、エキゾチックでワイルドな顔立ちをした黄色の胴着と袴を着た少年の姿があった。胴着を着ていても解るくらいに、小柄だが、ガタイの良い少年だ。

「誰だ！？てめえ!？」

と、不良の一人が言う。

すると、少年は…。

「私は、金太郎氏が館長をしている『烈光道場』に通う、金本銀二かなもとぎんじだ。キサマらのような、一人に対して複数の困みをする輩が嫌いだから現れた」

と、金本と名乗る彼は、礼儀正しく言う。

「なに、カッコつけてんだ、こいつ!？」

不良の親玉が、有希の襟首を離した。同時に、不良達の矛先が、金本少年に変わった。襟首を離されて、苦しさから解放された有希は彼の身を心配した。

「金本君とやら、危険だよ！」  
と、叫んだ。

だが…、金本は口元に笑みを浮かべて…。  
「安心しろ…。強さにも、レベルと言う物があって、私の強さは、  
なけ…。」

バゴツ！

と、彼がなにかを言おうとした瞬間、一人の不良が間を入れずに、  
彼の顔をぶん殴った。

金本の唇が切れ、血が飛んだ。まるで、ギャグ漫画みたいな感じ  
で。しかし、彼は倒れなかった。

隙だらけだった彼を、不良達は笑った。

「ははは！なんだ、こいつ！？全然、弱いじゃんかよ…！」

「こいつ、『バカ』じゃねえー…！」

「『バカ』だと…！」

急に、金本の顔が急変した。『バカ』と言う、一言で。今まで、  
平然を装っていた彼の顔が、まるで、某グラップラー漫画の登場人  
物みたいな血管を走らせた凶悪な表情になった。

その変化は、空気の読めない不良達をも黙らせて、有希の腰を抜  
かせた。

「『バカ』で悪かったな…、『バカ』で…。今だに、掛け算、割り  
算出来なくて悪かったなあ…！」

と、冷静さの欠けらもないデスポイスを放ちながら、彼は不良達  
に迫って行く。

そのときの状況を、福梨有希（17）は語る。

「いやー、不良達が悪かったのも、当然でしたが…。彼は、『バカ』って言葉を聞くと、ハイパー化するみたいですよ…」

「こんなこと言っても、信じてくれないと思いますが…。『仮面ライダーカ ト』みたいに、彼の姿が消えちゃったんですよ…」

「そうそう、不良達に襲い掛かるスピードが早すぎて、肉眼では、彼の動きを捉えられなかったんですよ…」

「そこからは、すぎましかったですよ…」

「彼が、なにをしたかって？」

「はい…、不良達三人を、同時にわしづかんで…。そう、まるで『三袋を両手で掴むように…』」

「そのまま、室伏選手のように体を回転させて…」

「はい、不良達三人を（体重を合計して、たぶん、180キロを）

…」

「ブン投げました…」

「はい、まるで、フリスビー投げみたいに…」

「ありゃ、たぶん、2キロ先まで飛んじやいましたね…」

「本当に、恐かったです…。あの不良達の生存が、気になります」

以上のことをやった金本は、こう言った。

「5キロ先まで、行くと思ったのに…」

有希は、足が震えた。

返済その17「絶対、自分だけが、この時代を変えて行ける」

前回までの話。

「私の名は…。天の道を往き…。総てを司る男…。かなもとぎんじ金本銀二だ！」  
と、また変なのが、有希の前に出現した。

貧乏神の赤井、なんかイヤミな青木と違って、本当の意味での危ないタイプが現れた。しかも、質が悪いことに、異常に戦闘能力が高く、下手に逆鱗に触れると、クロツクアップ（超高速移動）する最強の少年だ。

果たして、多重の危ない人達に囲まれた有希の運命は…。  
そして、たまに週刊誌が土曜日発売される理由とは…？

「どうやら、解ったようだな…。『バカ』と言っているのは、投げられる覚悟のある者だけだ」と…」

と何故か、今更、ぶん投げて行方を暗ませた不良達に向けて金本が言った。

そんな彼に、有希は近づく。一応、礼を言うつもりのようだ。

「あつ、金本君だっけ…。助けてくれて、ありがとう…」

半ば恐れつつ、有希は彼に礼を言った。

それを聞いた金本は…。

「気にするな…。私の師範代が言っていた…。『人を助けると、お礼で金とか、もらえるから、進んで人助けしなさい』と…」

その言葉を聞いて、随分、不純な動機だな…。と有希はツッコみたかったが、彼が怖かったので、やめておいた。

「それにしても、腹が減つたな…」

と、金本は自分の腹を抑えた。これは、遠回しに『飯おごれ』という意味であるのを、有希はすぐ感づいた。

というわけで、彼を色彩園に有希は連れてきた。

店の中では、店主が下ごしらえをし、紅美は、青木と共に準備をしていた。

だが、いつものように、赤井が居ないのが、有希は気になった。

「あれ？赤井さんは？」

と、有希は紅美に聞くと…。

「なんか、ここ最近、出番多かつたから、青木さんのキャラが立たないので、しばらくは割愛だつて…」

何故か、作者の事情に、詳しい紅美はそう答えた。だからか、店主が、なんか嬉しそうだ…。

「あれ？彼、有希君の友達かい？」

と、キャラの使い方が難しい青木が、有希が連れてきた金本に気付いた。

金本は、悠々と席に座り込んだ。そして、店内に貼られているメニューの品々に目を通していった。

「あつ、はい。さつき、彼に危ないところを、助けられて…」

と、有希は答えた。

「へえ、名前は…」

青木は準備をやめ、注文を聞くため、金本に近付き、名前を聞いた。

すると…、金本は青木の方に顔を向け…。

「私の名は…、天の道を…」

「金本銀二君だよ…」

自己紹介途中の金本に割り込むように、有希は彼の名前を教えた。割り込んだ理由は、さすがに版權やら、著作権やらが怖くなってきたからだ。割り込みされた金本は、有希を睨んだ。

「で、ご注文は？」

と、青木が金本に聞いた。

「…」

さつきまで、メニュー表を眺めていた彼だが、注文を聞かれた瞬間

間、口が開かなくなった。

「？」

聞こえなかったのかと思い、青木は、もう一度聞いた。

「ご注文は、なんですか？」

「……」

もう一度聞いても、口を開かない。

それに対して、有希は……。

「あっ、お金なら気にしないで、助けてもらったお礼だから、好きな注文しなよ」

と、そうフォローするが、金本は注文を言わなかった。

とりあえず、注文を言うまで待つてみることにした。

1時間後……。

まだ、なにも注文を言わない……。

その間は暇なので、有希と青木は適当な話題で話し始めた……（読み飛ばし可）

「青木さん……、好きな仮面ライダーは……？」

「ファイズ……」

「青木さん……、好きなガンダムは……？」

「ウイング……」

2時間後……。

やはり、なにも言わない……。

「実は、僕、みんなは嫌い言ってるけど、本当は龍騎が好きなんです……」

「確かに、最終回前には驚いたさ……」

3時間後……。

やっぱり、言わない……。

「女の子の体が柔らかいって、本当ですか……」

「下ネタは、やめなよ……」

4時間後……。

金本は、黙り込んだままだ……。

「僕、女の子と喋った事ないんです……」

「……」

とうとう、二人の話題も尽きた……。そして、有希の脳裏に嫌な予感がしてきた……。

まさか、このまま、次回に続くのか？こんなキャラの立っていない青木、金本を相手に、次回まで待たなければならぬのか！？  
ていうか、こんなに展開を引っ張るのは、まさか、ネタギレなのか！？

そんなはずはない！

そんなはず……。

ああ、だんだん文が適当になってきたぞ！

畜生、金本め……。いろんな意味で、クロックアップしやがった！

と、有希は思った。

残念ながら、次回に続く……。

返済その18「生きることが好きさ！青く光るコスモー！！」

5時間経っても、金本は注文を言わなかった。

そのため、とうとう、青木の思考回路にスイッチが入った。某ノート漫画みたたく、彼は金本が注文しない理由を事細やかに考えた。

（彼は、何故に、注文をしない？最初、腹が減ってなかったとしても、五時間経てば、腹が減るはずだ…）

青木は、金本の表情を見た。彼の顔は、なにかを我慢している顔だ。そして、腹の音がなっている。

（否！減っているのではない、減っていたのか？この切ない表情！？じゃあ、何故、注文を言わないのだ！！）

青木の独り相撲が始まる。一気に、有希が背景と化した。

（何故、言わない…。好きなメニューがないのか？いや、人間だれしも、腹が減れば、空腹を満たすことを優先するはずだ。適当に、とりあえずは、無難なのを注文するはず！というより、この店のメニューは意外に多い、ジャンルも広い。だから、嫌いなメニューがあるのか？というか…。好き嫌いなら、頼んだメニューに入ってたとしても、嫌いな食べ物を残せばいいはずだ。彼だって、それが解るはずだ…）

青木は周囲が見えなくなるほど、自分の世界に入り込んだ。

（何故、注文しない！？メニューに、目を通してるじゃないか！なら、何故、頼まない…。何故…）

すると、ある考えが青木の頭に浮かんだ。

（まさか…）

金本は、メニュー表を見ながら、切ない顔をしていた。なにかを言いたいのに、言えない辛い表情。だが、それが青木の浮かんだ考えを確信に変えた。

「そつか…、わかったよ…」

青木は、金本の肩に手を優しく当てた。



と、青木が事の真実を話した瞬間…、悲劇が始まった。

その時の状況を、福梨有希（17）は語る…。

「はい。青木さんの回答は正解でした…。確かに、彼は漢字が読めなかったのです…」

「はい…。正しかったです、使った言葉が悪かったんです…。なんで、青木さん…、知らなかったとは言え、『バカ』って言うちやっただのかな…」

「本当に、青木さんはカツコ良くて、頭良くて、金持ちで…」

「でも、なんででしょう…。彼は知らずに、知らずに、不幸な目に遭うんです…」

「だから、『バカ』と言われた時の金本君は、やはり、クロツクアツプしました…」

「そして、金本君は…」

その夜、色彩園の天井に大きな穴が開いた。

そして、青木の悲鳴が聞こえ、辺り一面に響いた。

「師範代が言っていた…」

と、金本は天井に開いた穴に指を差し、こう言った。

「『バカと言う奴が、一番、バカだと…』」

本当に、その通りだったから、有希は苦笑いをした…。

返済その19「最初に言っておく…。今回は、かなりー、短い！」

福梨有希（17）を悩ませる人々、カウントダウンハイパー！

第三位！赤井秀人（27）。

有希の親の借金を取りに来たヤクザ。紅美には弱く、店主と有希には恐怖の象徴。さらには、無意識に不幸を撒き散らす悪魔のような男。

この作品のクライマックスを握る最大の敵だ！

第二位！青木龍聖（21）

赤井、浦太郎のせいで、色彩園で働くことになった、頭脳明快、金持ちのイケメン青年。非の打ち所がないくらいに、完璧な彼。だが、天性の運の悪さと、空気の読めなさ、タイミングの悪さで、なんか可愛そう目に遭う。

まさに、悲劇の美青年。

そして、第一位！金本銀二（19）。

キン肉マンで言えば、ネプチューンマンか、悪魔將軍くらいの強さを秘めた鬼の子。だが、勉強しないで、体鍛えたため、漢字が読めず、計算も出来ず、徳川八代目将軍を『シヤア・アズナブル』と答える。

現在、もつとも有希の胃を締め付ける悪魔だ！

その悪魔が、早朝の公園の鉄棒で懸垂をしていた。

いつもの胸着姿で、汗だくになりながら、懸垂を繰り返している。

「1、2、3、4…？、6、8、9…。あれ…、何回目だっけ…」

ちなみに、彼は、すでに1000回以上やっている…。

懸垂をやめた金本は鉄棒から離れ、走り出した。そして、公園から去る。

彼は息を切らさずに、道路を走る。時折、時速30キロで走っている原付バイクを超越しながら。

彼が走り初めてから、数時間後経ち、夕暮れになっていた。大体彼は、まるまる半日走っていた…。

さすがに、彼は息切れし始め、足を静かに止め、走るのをやめた…。

そして、彼は夕暮れの街の景色を眺める。

金本は、この夕日と夜の境目になる空の景色が好きだった。淡い色の絵の具で塗ったような色合いのオレンジと黒の景色が、好きだった。

そして、呼吸が整ってきた金本は大きく息を吸い、街並を見ながら、こう言った。

「ここ、どこ…?」

金本の目に映る景色は、見たことない街だった…。

埼玉県K市の一軒にある色彩園の電話が鳴り響いた。

有希は電話を取った。

電話は、金本からだった。

「どーしたの…?」

有希は、天井に開いた穴を覗みながら、金本からの用件を聞いた。「なあ、キサマ…。『やまがた』って知ってるか? さっき、通りすがりの人が教えてくれたんだが…」

と、金本は話す。

「ああ、『さくらんぼ』と『はえぬき(お米)』、『将棋』で有名な『山形県』ね…。それが、どうしたの?」

意外に、地理に詳しい有希が、そう言うと、金本は…。

「今、そこに居るんだが、帰り道が解らないから、迎えに来てくれ」

有希は、電話を置いているテーブルの角に頭をぶつけて、血を噴き出した。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5201c/>

---

極彩タップス

2008年11月7日08時14分発行